

広島大学平和センター主催 広島平和記念資料館共催 令和5年度市民公開講座  
「多極化社会と被爆の記憶～普遍的な平和を創るために～」を開催しました

2月24日、広島国際会議場ヒマワリにて、令和5年度市民公開講座「多極化社会と被爆の記憶～普遍的な平和を創るために～」(広島大学平和センター主催/広島平和記念資料館共催)を開催し、一般市民の方々100名以上が参加しました。

記憶学の第一人者である、英国国立グラスゴー大学社会科学科 グローバル安全保障・記憶学教授のアンドリュー・ホスキンス先生を招聘し、“Forgetting Hiroshima: The crisis of living memory in the digital era (広島の忘却—デジタル社会と『生ける記憶』の危機—)”という演題で特別講演をいただきました。急速に進化する生成AIが「被爆の記憶」継承を脅かすリスクを指摘し、被爆者の言葉や声が、AIによって作り替えられる事のないよう、十分な保護と法整備が早急に必要であると述べられました。

平和センターのファンデルドゥース瑠璃准教授は、「75年は草木も生えぬ」という言説が、ジェイコブソンとオッペンハイマーの論争に端を発した終末論から、次第に広島の復興を成功に導くための原動力になり、平和都市としての広島のアイデンティティーの確立につながった経緯を説明し、ヒロシマの記憶が生き続ける方策を示唆しました。広島平和記念資料館の小山亮学芸員からは、2月に入れ替えをした展示資料やご遺品について紹介され、多極化する世界の中で、親子や人と人との結び付き、愛着ある人との結び付きを感じ取ってほしいと呼びかけました。

パネルディスカッションでは、友次晋介平和センター副センター長をモデレーターに、川野徳幸平和センター長、滝川卓男広島平和記念資料館長も加わり、参加者からの鋭い質問に回答しながら、情報が氾濫するデジタル社会で記憶の忘却に対し、どのように対応するのか、幅広い視点から議論しました。



特別講演でのホスキンス教授



パネルディスカッションの様子